

第33回日本看護科学学会学術集会開催

多領域の連携で社会の課題に立ち向かう

2013年12月6—7日、大阪国際会議場（大阪市）にて第33回日本看護科学学会学術集会が開催された。「看護の力で社会が変わる」をテーマとした今学会では、看護や教育制度のみならず、工学や経済など多様な文化、学問、技術と看護との連携を考えることが目指された。2日間で交流集会45題、口演178題、示説729題が発表され、複合的な視点から看護にまつわる社会問題、教育、医療安全まで多岐にわたるテーマが紹介された。

“特定看護師”の現状と未来

交流集会「“特定看護師”のかかえる課題および支援体制について考える」では、その活用の現状と課題、支援体制に関する意見交換が行われた。

平野優氏（国立長寿医療研究センター）は、特定看護師（従来の看護業務を拡大して医学的介入を行う看護師）の院内研修8か月目の立場から、その研修内容や日常業務について紹介し、院内での具体的な活動に対する理解が得られていないため、役割の明確化や研修プログラムの統一が必要だと述べた。続けて、院内研修2年目の山口壽美枝氏（国立病院機構大阪医療センター）は、特定看護師が互いの活動を把握し、一体感を持って協働するために、互いにコミュニケーションを図る機会が必要だと話した。

また、井出恵子氏（東京ベイ・浦安市川医療センター）は、特定看護師の存在は医師と看護師間のコミュニケーションの質向上や、医師の医学的判断の意味を看護師が理解することにもつながると報告した。

質疑応答ではインシデント発生時の責任の所在が話題に上がり、医師の包括的指示のものと行為であっても、医療行為の実施者が常に責任を持って患者と接することの重要性が強調された。

外国人看護師受け入れの課題

交流集会「外国人看護師候補者受け入れ支援をめぐる、これからの課題」では、FTA（自由貿易協定）、EPA（経済連携協定）交渉による外国人看護師の受け入れ開始から6年目を迎えたことを受け、その活用実態についての議論がなされた。

まず、中村悦子氏（新潟青陵大学）からこれまでの受け入れの背景説明がなされ、続いて実際に外国人看護師候補者を受け入れている服部満生子氏（河北総合病院）が、その教育や支援の実際について報告した。同院では2008年、2名の候補者を受け入れ、最終的に1人は看護師国家試験に合格、1人は帰国してしまったが、その結果には来日の動機、家族背景なども影響しているという。これらの問題の本質を見据えて、個別対応も交えながら解決することが必要であるという課題を提示した。

大学間の連携による新人看護師の不安解消

交流集会「新人看護師の看護技術習得支援プログラムを考える」では、2009年度から始まった文部科学省の「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」の1つとして2009年に採択された、九州・沖縄の14大学が連携し、各大学の設備を利用しながら新人の看護技術学習支援を行う「看護系大学から発信するケアリング・アイランド九州沖縄構想」の取り組みが紹介された。

ここでは、出身大学や勤務病院にかかわらず、希望者は何度でも各大学での技術習得支援研修を受講することができる。自院では質問がしづらい、集合研修の進行に付いていけないなどの問題を抱える新人看護師にとって、院内での研修よりも自分のペースで学べることなどから看護技術習得への不安が解消され、離

職率の低下にもつながったという。病院側も「気になる新人」を積極的にプログラムに参加させるなど、大学と病院の連携が大きな役割を果たしていることが報告された。

他分野との相互連携

シンポジウム「他分野との連携・協働による新たなサービスの創造と看護の力——看護学と工学・情報工学の連携・協働」では、看護と工学双方に関わる演者3名から、看護と工学の連携の現状と今後の展望が語られた。

真嶋由貴恵氏（大阪府立大学大学院工学研究科）は、看護職から工学研究科教授になった自身の経験を踏まえながら、看護と工学が相関しながら新たな道具やシステムを作り出す「相互創造」への展望について話された。声帯を失った患者のための人工肉声や看護補助ロボット、動きセンサーによる新人の採血技術支援などICTの看護への貢献を紹介し、看護と親和性の高い種類の工学を臨機応変に活用することが、看護技術の暗黙知の解明や効果的な学習支援につながると述べた。

真嶋氏は引き続き交流集会「看護教材の電子化」でも発表し、看護教育におけるICTの活用の実際を紹介した。電子媒体に慣れた今の学生の興味を引くためには、従来の紙媒体に留まらない新しい学習方式が必要であると述べ、eラーニング教材のフィードバックの即時性や双方向性の意義を強調した。紙ベースのコンテンツを電子化したものだけではなく、パソコン、タブレット、ゲーム機など使用デバイスに合わせて操作性を工夫したものや、自身の看護技術実施映像を熟達者の手技映像と比較して、リフレクション、考察、トレーニングを促す教材など、多様な展開を紹介。交流集会参加者も教材サンプルを閲覧しながら「自院でも活用したい」と話していた。（本誌編集室）